

*愛は信じるもの……

今、あなたは何処に——
たとえ二人は離れていても
暖かく頬を伝ったイエスタデイの愛を
私はいつまでも信じています

イエスタデイ



'80年代へ旅立つ若い世代のあなたに——
この感動を涙でうずめてください。

VINCENT VAN PATTEN CLAIRE PIMPARÉ in **YESTERDAY** directed by LARRY L. KENT

クレア・ピンパール/ビンセント・バン・パテン
エディー・アルバート/ニコラス・キャンベル/クロリス・リーチマン
音楽: ホール・ペイラー・ジョン
主題曲(スマイル・アゲイン) ニュートーン・ファミリー
オリジナルサウンドトラック RCAレコード



期待の新星クレアと名優たちのハーモニーが感動の涙を



●クレア・ビンパール

この映画のヒロイン、ガブリエルには1,000人の中から選ばれたラッキーなフランス系カナダ人クレア・ビンパール。どこかミステリアスな魅力を秘めながら、明るく、想像力に富み、しかも知的で意志も強い。さまざまな個性に包まれて、悲劇的なラブ・ストーリーのヒロインにぴったりだ。

●エディ・アルバート

顔を見ただけでおなじみのベテラン俳優。「ローマの休日」で盗み撮りをするカメラマンに扮した彼の褐色の髪も、今や真っ白。「イエスタデイ」では孫のマシューと、市民の義務、名誉、家族愛などについて語る重要な役で出演している。

●クロリス・リーチマン

「デリンジャー」「ヤング・フランケンシュタイン」などの名優、72年の「ラスト・ショー」では愛に飢えた中年女性を演じてアカデミー助演女優賞を獲得。

この映画の出演はマシューの母親役。

80年代、愛の映画が再びあなたを魅了する

1970年代は、ハリウッドにとって受難の時代だった。「大統領の陰謀」「地獄の黙示録」はベトナム戦争下の政治の墮落を暴露して人間の尊厳を問い、「グッバイガール」「結婚しない女」は家庭制度への懐疑なしでは生まれない名作であった。過去への悔恨と反省が、立場をかえてこれらの名作を生みだしたともいえるが、それは同時に、パニック映画におどろき、オカルト・ショック映画におびえ、SF映画に胸ときめかすだけで満たされるものではない。

希望をもって何かをつかみたい。そうした願望が、ハリウッド映画に片方では西部劇ブーム、つまり開拓と建設への夢を起し、片方ではやさしい愛の復活をのぞんでいるかに見える。「クレイマー、クレイマー」も愛や期待を未来に託さずして語れるものではない。「イエスタデイ」は題名もずばり、ある過去の記憶、ある愛のかたちを描いたものだ。ケネディ、ニクソン、ジョンソンの60年代という時代。ボクシングのアリ、ロックのビートルズ、ヒッピー運動の申し子フラワー・チャイルド、ベトナム出兵と兵役拒否学生の逮捕。1967年……つい昨日のアメリカ、思い出のイエスタデイである。

「イエスタデイ、それは愛を生きること

カナダのモントリオール。フランス系カナダ人の女子学生ガブリエルが、留学中のアメリカの医学生マシューと知り合ったのもこのとき。愛し合うことが罪なのか、それとも愛を引き裂いた国境や戦争が間違いなのか。平和なときには全く感じない小さなミス・テークが、彼をガブリエルから奪い去る、そしてさまざまな苦しみ彼女をうえにのしかかる。

なぜなら、彼女はマシューという外国人の子を妊娠していたから。彼との永遠の愛を信じて、未婚の母となる道を選んだから。

愛する人の子をうみたい。それは女性にとって誰もが抱く夢だろう。生まれ出る子には、彼が生きているのである。ヒロインのガブリエルは確かに「クレイマー、クレイマー」の自立する妻とは生き方が違う。しかし女が結婚し、子供を持つがぎり、国境や戦争に関係なくこれはあなたのテーマでもある。しあわせをつかみたかったら、あなた自身が切り拓いて行くしかないことを、この映画は訴えている。

ニュートン・ファミリーの愛の歌



●ニュートン・ファミリー

ハンガリーのABBAと呼ばれ、世界に向けて踊り出た人気絶頂のポップ・グループ、ニュートン・ファミリー。社会主義国から初めてのポピュラー・レコード「サンタ・マリア」の大ヒットで、日本の音楽ファンにはもうすっかりお馴染みになったグループだ。

2曲目の「ドン・キホーテ」に続いて放つのがこの映画の主題歌「スマイル・アゲイン」。これまでの彼らのハッピーな曲調とは一味ちがひ、哀愁をおびた美しいメロディ・ラインを強調したバラードになっている。

リード・ボーカルのエバ・チェブレギは、ブロード・ヘアーのチャーミングな女の子。メンバーのバックコーラスとの抜群のハーモニーが映画の雰囲気盛り上げ美しいラブ・ストーリー「イエスタデイ」とニュートン・ファミリーとの素晴らしい出会いは、この映画を観る者にとって強い印象を残すことだろう。

レッドフォードの再来！ 噂のビンセント！



●ビンセント・バン・パテン

ビンセントの名は俳優だけでなく、いやむしろ俳優よりもプロ・テニス選手として有名で、78年プロに転向、ウィンブルトンに登場。80年セイコー・スーパー・テニスで来日日本でも顔なじみのプレイヤーとなった。カリフォルニア州で賞金額第二位の地位にある。

屈託ない爽やかな表情、スポーティな身のこなし。彼のようなタイプは、ハリウッド映画でいう「オール・アメリカン」な、「ボーイ・ネクスト・ドア」(隣家の男の子)の典型だ。だがこのステレオ・タイプなハンディキャップ(?)を見事に乗り越えて、ビンセントはマシュー役を見事にこなしている。

★新春ロードショー！

歌舞伎町コマ劇場前 (200)
新宿東急 1981

伊勢丹斜め前 (351)
新宿薬パラス 3061

渋谷東急文化会館B1 (407)
渋谷東急レックス 7019

東口バルコ先左側 (971)
池袋東急 2727

有楽町フードセンター前丸の内東横地下 (535)
丸の内薬パラス 4740